



1931年生まれ。  
児童文化・女性文  
化研究家。

かつて、私たちは、子どもについては、一通り理解し得ているかに思い込んでいた。ところで、最近の大人たちは、その信条が崩された条件を把握できないまま、「子どもとは理解不能で対話不能の異星人である」というコミュニケーション遮断の心情に支配され始めている。

小さい人たちは、**I**、彼らなりにどこかに足場を置いて、この世界に存在しているはずである。その立地点が私たちに見えにくいので、彼らとのコミュニケーションが遮断されてしまうのだ。言い換えれば、子どもたちは彼らなりに「自身の居場所」を作っているが、その居場所が私たちには見えにくく捉え切れないということでもある。いまここで、私もは、コミュニケーションの断絶を問題にしようとしている。したがって、まずとりあえずは、コミュニケーション・ツールを手掛かりにして彼らの<sup>1</sup>付む場所<sup>たす</sup>を探し出してみよう。

私たち人間は、古くから様々なツールを使用して人と人との間のコミュニケーションを成立させてきた。**II**、音声言語、たとえば文字の開発に伴う書き言葉、さらには、音声を電波に乗せて個人間に情報を運ぶ電話など、陸続と開発されるニューメディアによって、人と人のコミュニケーションは大幅な変化を被り、それによって人の暮らしの領域は大きく広がりに続けた。

そして、当然のことながら、人と人の関係も多様な変化を余儀なくされている。したがって、コミュニケーション・ツールが**進**歩の勢いで開発される今日、子ども—大人関係が目まぐるしいほどの速さで更改を迫られることは当然と言い得る。たとえば、子どもたちがインターネットを駆使して形成する交友関係は、子ども自身の世界に閉じられていて、親と言えども介入を許されず、**2**コミュニケーションの断絶を嘆かざるを得ない状況が生じることは周知であろう。

子どもたちは、いま、新しいツールの発達と伴走しつつ、大人たちを楽々と追いつき、先へ先へと急ごうとしている。大人たちは、既存の体系への適応のために、既に、文字ツールに熟達し対面的関係を基本と考えるコミュニケーション文化の住人としての能力を獲得している。それに比して、それら既存の文化体系への適応ツールも未習得であり学習中である彼らは、新ツールに対しても同様の興味を示してエネルギーを注入する。その結果、コンピュータ文化へのためらいのない参入において、大人を遙かに越える優越性を示すのである。

子どもたちは、コミュニケーション革命に関して、その方向を先取りし、変化の流れの先に位置している。比喩的に言えば、私どもが「現在」という時間に滞在しているとき、彼らは「近未来」の時間に既に入り込んでいる。その時間的ずれが、両者の関係にきしみを生じさせて、時にコミュニケーションの断絶あるいは不能と見える状況を招き寄せ、大人たちを困惑させているのではないだろうか。

ツールが新しくなるとき、それを使用する人と人とのコミュニケーション状況が大幅に変化するだけでなく、既存のコミュニケーション・ツールにもその影響が及ぶことは自明であろう。とりわけ、コンピュータ文化の場合は、「言葉」という既にコミュニケーション・ツールとして、人と人を結び付けるための主要な役割を果たしている道具が、言語体系としては同様のシステムを維持しながら、その機能において看過し得ぬ変貌を余儀なくされつつあるのではないだろうか。

たとえば、Eメールは、使用者が日本語を用いるとき、日本語そのもののシステムはそのままに維持されて使用される。しかし、その場合も、それら言語は、従来の「話し言葉」あるいは「書き言葉」と同様の機能を發揮しているとは言い難いだろう。「話し言葉」は、語り語られる両者の関係において機能し、相手の反応に応じて変化し変化させられるのが常態である。つまり、単純な一方通行は不能ということだ。一方の「書き言葉」にしても、**3**完全な自分中心は許されない。書き手がある言葉を採用したとき、それは、一定の形を持った文字と一定のきまりを持った文法に従って紙上に書き綴ることを要求する。子どもが自分一人で勝手な文字を作りだ

**テーマに迫る**  
私たちは、思考や表現をする際に、様々なメディアに依存している。そしてそれらのメディアは時代とともに変化するため、私たちの思考や表現のあり方も、世代によって異なるものにならざるをえない。そこから生じる世代間コミュニケーションのギャップについて論じた文章である。

**問一** 空欄**I**、**III**に当てはまる最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選べ。  
(各2点)

① なぜなら ② たとえば ③ したがって  
④ しかし

I  II  III

**問二** 傍線部1とあるが、このような「場所」にいる「彼ら」についての説明として最も適切なものを、次から一つ選べ。  
(6点)

- ① 他とのコミュニケーションを行おうとしない。
- ② 既存の文化を学ばず新しいツールに習熟していく。
- ③ 書き言葉の習熟を放棄してしまう。
- ④ 既存の文化体系への適応を強いられる。
- ⑤ 大人に先んじて未来に近づいている。

**問三** 傍線部2とあるが、このように嘆いている大人は、子どもをどのようなものと見なしているか。それを言い表した十五字以内の語句を抜き出せ。  
(6点)

**問四** 傍線部3とあるが、「書き言葉」でのコミュニケーションにおいて、「完全な自分中心は許されない」のはなぜか。五十字以内で説明せよ。  
(10点)

**問五** 傍線部4とあるが、その理由を五十字以内で説明せよ。  
(10点)

し、勝手な文法を構築して、それを綴ることは不可能であるばかりか、しかもそれから制約に従って書かれたものにしても、一定の時間を経過した後には相手に届くから、文字で綴られた手紙などは、送信者の自己中心な世界をそのまま伝えるのではなく、送信者の側には投函するまでの時間、受信者の側には「送付されたものを受け取るまでの時間」というカンショウ地帯が介入することになる。Ⅲ、直情的に感じられたままが伝わり、それに触発され相手もまた激情するなどという両者の関係が生じにくいということになるのである。

それに比して、コンピュータで使用される文字言語は、同じ文字と文法による書き言葉でありながら、その伝達速度においては、さながら「話し言葉」同様の相互関係を作り出している。しかも、それでいて、受け手の反応を受し得ないために、送り手の自己中心な世界をそのままに先方に送り届けてしまうことになる。たとえば、対面型コミュニケーションの場合には、「あなたは変だ」と言いかけた発信者が受信者の反応を見て、「変に見える」と修正することは容易である。しかし、<sup>4</sup>コンピュータで発信された言語は、「変だ」と感じた発信者の直感をそのまま断定的に、素早く相手方に送り届けてしまうのである。「書き言葉」という従来の主要ツールがそのまま使用されながら、その機能が変化しつつあるというこの新事態を、彼らとのコミュニケーションに対して感じさせられる違和感の一因として考えてみたらどうだろうか。

50

55

60

65

問六 筆者の考えに合致するものを、次から一つ選べ。(8点)

- ① いつの時代も大人は、子どものことを、自分たちの理解の及ばない存在であると見なしつけてきた。
- ② 従来と同じシステムを持つ言語が異なる機能を伴って用いられるとき、人は違和感を覚えがちである。
- ③ 子どもは新しいツールにすぐに飛びつくが、実際にはそれを使いこなすことができない場合が多い。
- ④ 大人と子どもの間に断絶が生じるのは、両者の用いる言語がまったく異なった体系性を持つためである。
- ⑤ 子どもは、既存の文化体系への適応ツールについて学習し終わると、すぐに新しいツールの習熟に向かう。

● 語彙

傍線部イ「進歩」の空欄に入る漢字をそれぞれ答えよ。また、傍線部ロ「カンショウ」を漢字にするときに適当なものを次から一つ選べ。

- ロ 「カンショウ」
- ① 鑑賞
  - ② 干渉
  - ③ 感傷
  - ④ 緩衝
  - ⑤ 観照



(各2点)

b コミュニケーションに未来はあるか

<sup>1</sup> 近代的な権力に適合しているメディアは、印刷文字によるマスメディア、とりわけ新聞である。新聞は、もちろん権力とは独立に情報を散布するのだが、新聞を可能にしているのは、近代的な権力を実現したのと同じシステムである。第一に、新聞は、同じ日の出来事を同一紙面に併置することで、同一時点の空間を均質的なものとして扱う。そして第二に、新聞は、空間へのこうした照準の仕方に見合うような形で、出来事についての情報を、空間内の——送り手にとってもまた互い同士にとっても未知の——多数の読者に、速やかに、ほぼ同時に告知する。新聞にとって、社会的な空間は、いずれかの特異点からの遠近に依存しない、均質的・普遍的な領域なのである。

5

フーコーは、近代的な権力への従属は個人を「主体」に転ずる、と述べている。新聞を読むことは、<sup>2</sup> 普遍的な均質空間の全体を一挙に捉え、その内部の出来事に対して総合的・反省的な判断を加えることを可能にする。新聞の読者に提供されるこうした能力こそが、主体を特徴づける性質でもあるだろう。この点からも、新聞は、近代的な権力の作動に寄生し、またそれを補完していると見ることができ。

10

しかし新聞は「不完全な」メディアである。新聞は、実際には均質空間の内部の一部の出来事を蒐集できるのみであるし、またそれらの出来事についての情報を見えない多数の読者に対して、完全に即時かつ同時に伝達できるわけではないからだ。新聞の見果てぬ夢を現実化したのは、電子的なマスメディアであるラジオやテレビである。しかしそれらは、近代的な権力を保証していたシステムにとって思わぬ自己破綻的な効果をとまっていた。

15

ラジオが、さらにテレビが新聞の夢を現実化した。テレビは、新聞よりも広範な領域の情報を、より広範な視聴者の集合にむけて、より速やかに伝達することが

20

おさわまざち 大澤真幸



1958年生まれ。社会学者。

/50

問一 傍線部1とあるが、「近代的な権力」がしようとしてきたのは、どのようなことか。それを言い表した二十五字以内の語句を本文中から抜き出し、最初と最後の四字を答えよ。(5点)

問二 傍線部2とあるが、こうした「主体」の世界の知覚の仕方を比喩的に言い換えている二十五字以内の語句を本文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。(5点)

問三 傍線部3とあるが、それは、「読者」に対してどのようなことをすることか。四十字以内で説明せよ。(10点)


問四 傍線部4が実現することに該当するものを○、そうでないものを×とせよ。(各2点)

- ① 技術上の直接民主主義
- ② 権力から配給された情報への信頼
- ③ 分散する諸個人の決定の、単一の決定への集計



きるのだ。近代的権力は、あらゆる空間・時間を均等に監視・観察することを目指してきた。テレビの「眼」は、この権力が夢想していた眼の形態に大きく近づいたのだ。もちろん諸個人は、自らの部屋でテレビの画像を眺めることで、このテレビの眼を我が物とすることができる。こうして諸個人は、理想的な「主体」となる。付け加えておけば、各個人がテレビだけではなく、コンピュータの端末をもち、ネットワーク上のデータベースに容易にアクセスできるような段階に達すれば、「主体」としての完成度は一層高いものになるはずだ。

一九世紀への転換期にカントが理論的に定式化した「主体」が、こうして、電子メディアの力を借りて真に現実化したように見える。カントによれば、知覚し、判断した多様な対象をさらに総合し、統一化する作用——「統覚」と呼ばれる——によってこそ、主体性は定義される。テレビを見たり、データベースを駆使する個人は、世界で生起するあらゆる出来事を知覚し、これらに対して総合的な反省を加える主体としての理想的な位置を獲得していることになるだろう。

だがしかし、この理想的な主体こそ、最も惨めな主体へと通じているのである。主体としての完成度は、より広範な情報を知覚し、総合する能力が獲得されるほど上昇する。こうした普遍的な知覚の域に近づこうとすれば、テレビは多チャンネル化しなくてはならない。このテレビの眼を視聴者が獲得しようとするれば、不可避に強いられるのはザッピングである。もともと主体であるということは、世界の総体を視野におさめる神の普遍的な眼を有することであった。だがザッピングという行為を規定しているのは、逆に、自らが見ていることがその度に部分的・局所的なものでしかないということの痛烈な意識である。そしてこれを克服すべき主体的な総合の営みは、ただひたすらチャンネルを切り替えるだけの最も消極的で惨めな行為でしかない。こうした状況は緩和されるどころか、より強化されるのみである。

近代的な権力とこれに便乗した1対n型のマスコミは、世界を普遍的に眺望する超越的な視点が単一なものとして存在しうることの想定によって可能になる。この想定に託して情報が配給されたとき、その情報が信頼され、受け入れられるのである。しかし電子メディアがこうした視点を技術的に実現しようとしたまさにそのときに、人々にとつて、こうした普遍的視点を想定することの現実性が失われてしまうのだ。これが、見てきたような主体性の否定として結果する。

しかし考えてみれば、本来、パソコンのような電子メディアは、カウンター・カルチャー運動の中で、権力からの解放のツールとして構想されたのだ。そうだとすれば、電子メディアによって権力がその基盤を侵されてしまうということはむしろ朗報ではないか。カウンター・カルチャーの反権力運動が目指していたのは、直接民主主義的な共同体である。今日、コンピュータ間のn対nのコミュニケーションは、直接民主主義を技術的に可能にしつつある。だが、電子メディアの直接民主主義は、主体を襲った逆説を共同体のレベルで再現する。

民主主義は、分散する諸個人の決定を単一の決定へと集計する操作である。こうした操作が有意味であるためには、集計の対象となる領域（国民—国家等）が統一的な意志を有することがあらかじめ想定されていなくてはならない。だが、それに對して統一的意志が帰せられる領域を決定していたのは、もともと、1対nのコミュニケーションの到達範囲だったのである。だが、電子メディアによる1対nのコミュニケーションの極端な強化やn対nのコミュニケーションの登場は、こうした領域の統一性を、自明なものではなくしてしまう。

**語彙**

- \* ザッピング：チャンネルを次々と切り替えること。
- \* n：不定整数を指す。
- \* カウンター・カルチャー：対抗文化。時代を支配する文化に対抗する、もうひとつの文化。若者による反権力的な文化を指すことが多い。

- ④ n対nのコミュニケーション  
⑤ 1対nのコミュニケーション

①  ②  ③  ④  ⑤

問五 傍線部5とあるが、「惨めな主体」が生じるのは、テレビのどういうあり方が、視聴者にどういう意識をもたらすからか。六十文字以内で説明せよ。(10点)


問六 傍線部6とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。(6点)

- ① 権力から解放された民主主義の共同体を実現するよう見えながら、実は、領域的な統一性を崩す点で、民主主義の基盤を否定することになるといふこと。
- ② 直接的な民主主義は、権力への集中を防ぎ民主主義を高度化させるように見えながら、実は権力によって成立する民主主義を否定することになるといふこと。
- ③ n対n型のコミュニケーションが、人々を主体的存在として自立させるように見えながら、実は、人々の主体性を否定し、惨めな存在に陥れるといふこと。
- ④ 反権力的な直接民主主義の共同体を実現するよう

見えながら、実は、少数意見の尊重という民主主義の原則を失わせ、権力の温床になっていくといふこと。

⑤ 直接民主主義が、電子メディアの世界だけでなく現実の共同体においても実現するように見えながら、実は理論段階に留まるだけだといふこと。

**語彙**

傍線部イ「見果てぬ夢」、ロ「朗報」の意味として適当なものを、次からそれぞれ一つずつ選べ。(各2点)

- イ 「見果てぬ夢」
- ① 追い求めても実現しない事柄
  - ② 見切りをつけてしまった幻想
  - ③ 理想として追求する目標

ロ 「朗報」

- ① 思いがけない知らせ
- ② うれしい知らせ
- ③ 驚くべき知らせ